『論語私存』訳注（十五）完

水野　実・阿部光麿・大場一央・松野敏之　編

凡例

・底本は、北京市国家図書館蔵『四書私存』（明嘉靖二十二年刻本）を用いた。
・原文において判読出来ない字は□で表記した。
・書き下しにおいて、『論語』本文における□は〔　〕で示した。
・書き下しにおいて、季本注における□は、類推できる場合は〔　〕で示し、校異を附した。
・季本『説理会編』は、清華大学図書館蔵明馮継科刻本（四庫全書存目叢書所収）を用いた。
・校異および解釈には、朱湘鈺 点校、鍾彩鈞 校訂『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所、二〇一三年六月）を参考として用いた。

論語私存卷十九

會稽季本箋釋

子張第十九

【一】

子張曰、士見危致命、見得思義、祭思敬、喪思哀、其可已矣。

思與九思之思同。四者立身大節、最人所難。子張之學、時已就實、故以此爲可。已矣二字、終語之辭、非以爲可已也。

［訓読］

子張曰く、士は危きを見て命を致し、得るを見て義を思ひ、祭に敬を思ひ、喪に哀を思へば、其れ可なるのみ。

思は、九思の思と同じ。四者は身を立つるの大節、最も人の難しとする所。子張の学は、時に已に実に就く、故に此れを以て可と為す。已矣の二字は、終語の辞、以て已(や)むべしと為すに非ず。

［語釈］

○九思　『論語』季氏篇・10章に「孔子曰く、君子に九思有り。視るには明を思ひ、聴くには聡を思ひ、色には温を思ひ、貌には恭を思ひ、言には忠を思ひ、事には敬を思ひ、疑ふには問を思ひ、

忿るには難を思ひ、得るを見ては義を思ふ」とある。

○四者立身大節　『論語集注』季氏篇・10章に「四者は身を立つるの大節。一も至らざること有れば、則ち余は観るに足ること無し。故に士、能く此くのごとければ、則ち其れ可なるに庶(ちか)しと言ふ」とある。

○非以爲可已也　「可已」については「已(や)むべし」の訓も可能である。用例としては、『孟子』離婁上篇・27章に「生ずれば則ち悪んぞ已(や)むべけんや」とある。本章の「其可已矣」の「已矣」は終助詞であるというのは、四者を実践できれば「可なるのみ（善い）」と述べたのであって、「已(や)むべし（やめてもよい）」という趣旨ではないとの指摘となる。

【二】

○子張曰、執德不弘、信道不篤、焉能爲有、焉能爲亡。

執德弘、言弘也。信道篤、言毅也。焉能爲有亡、言此人有之不足以爲重、亡之不足以爲輕、蓋雖亡之可也。

［訓読］

○子張曰く、徳を執ること弘からず、道を信ずること篤からざれば、焉んぞ能く有りと為さん、焉んぞ能く亡しと為さん。

『論語私存』訳注（十五）完　（水野・阿部・大場・松野）

徳を執ること弘しとは、弘きを言ふなり。道を信ずること篤しとは、毅きを言ふなり。焉んぞ能く有り亡しと為さんとは、此の人、之れ有るも以て重しと為すに足らず、之れ亡きも以て軽しと為すに足らず、蓋し之れ亡しと雖も可なるを言ふなり。

【三】

○子夏之門人問交於子張。子張曰、子夏云何。對曰、子夏曰、可者與之、其不可者拒之。子張曰、異乎吾所聞。君子尊賢而容衆、嘉善而矜不能。我之大賢與、於人何所不容。我之不賢與、人將拒我。如之何其拒人也。

傳習録謂子夏論交、是初學之事。子張論交、是成德之事。此固然矣。但子張本旨專爲拒字而發、謂於不可者不當有拒耳。不可者不拒、即泛愛衆之意也。可者與之、即親仁之意也。豈可盡以子張爲過高哉。

［訓読］

○子夏の門人、交はりを子張に問ふ。子張曰く、子夏、何をか云へる、と。対へて曰く、子夏曰く、可なる者は之に与(くみ)し、其の不可なる者は之を拒め、と。子張曰く、吾が聞く所に異なり。君子は賢を尊びて衆を容(い)れ、善を嘉(よみ)して不能を矜(あは)れむ。我の大賢ならんか、人に於て何の容れざる所あらん。我の不賢ならんか、人、将に我を拒まんとす。之を如何ぞ其れ人を拒まん、と。

伝習録に謂ふ、子夏、交はりを論ずるは、是れ初学の事。子張、交はりを論ずるは、是れ成徳の事。

此れ固に然り。但だ子張の本旨は専ら拒の字の為にして発し、不可なる者に於いて当に拒むこと有るべからざるを謂ふのみ。不可なる者は拒まずとは、即ち泛く衆を愛するの意なり。可なる者は之に与すとは、即ち仁に親しむの意なり。豈に尽く子張を以て過高と為すべけんや。

［語釈］

○傳習録謂子夏論交～是成徳之事　『伝習録』巻上・111条に「子夏の門人、交はりを問ふの章を問ふ。先生曰く、子夏は是れ小子の交はりを言ふ。子張は是れ成人の交はりを言ふ。若し善く之を用ふれば、亦た倶に是なり」とある。

【四】

○子夏曰、雖小道、必有可觀者焉。致遠恐泥。是以君子不爲也。

學貴於立大本。舍大本而求精於一事一物、雖亦足以成一藝之名、然不能通天下之志。非所以達於大道也。故曰致遠恐泥、君子不爲。蓋君子之所爲者、立大本而已矣。此與小知大受意亦同。

［訓読］

○子夏曰く、小道と雖も、必ず観るべき者有り。遠きを致すには泥まんことを恐る。是を以て君子は為さざるなり。

学は大本を立つるを貴ぶ。大本を舍てて一事一物に精ならんことを求むれば、亦た以て一芸の名を成

『論語私存』訳注（十五）完　（水野・阿部・大場・松野）

すに足ると雖も、然れども天下の志に通ずる能はず。大道に達する所以に非ざるなり。故に曰く、遠きを致すには泥まんことを恐る、君子は為さざるなり、と。蓋し君子の為す所の者は、大本を立つるのみ。此れ小知大受の意と亦た同じ。

［語釈］

○小知大受　『論語』衛霊公篇・33章に「子曰く、君子は小知すべからずして、大受すべし。小人は大受すべからずして、小知すべし」とある。

【五】

○子夏曰、日知其所亡、月無忘其所能、可謂好學也已矣。

温故而知新、日知其所亡也。得一善、則拳拳服膺而勿失、月無忘其所能也。其工夫只在時習、時習不已、所以爲好學。汪氏謂從事於子夏之言、而加以時習之功。其意亦重在時習、但意圓而語滯耳。

［訓読］

○子夏曰く、日に其の亡き所を知り、月に其の能くする所を忘るる無きは、学を好むと謂ふべきのみ。

故きを温ねて新しきを知るは、日に其の亡き所を知るなり。一善を得れば、則ち拳拳服膺して失ふ勿きは、月に其の能くする所を忘るる無きなり。其の工夫は只だ時に習ふに在り、時に習ひて已まざるは、学を好むと為す所以なり。汪氏謂ふ、子夏の言に従事して、加ふるに時に習ふの功を以てす。其の意も

亦た重んずること時に習ふに在り、但だ意円かにして語滞るのみ。

［語釈］

○温故而知新　『論語』為政篇・11章に「子曰く、故きを温ねて新しきを知れば、以て師たるべし」とある。

○得一善、則拳拳服膺而勿失　『中庸章句』8章に「子曰く、回の人と為りや、中庸を択び、一善を得れば、則ち拳拳服膺して之を失はず」とある。

○在時習　『論語』学而篇・1章「学びて時に之を習ふ」を踏まえる。

○汪氏謂～而加以時習之功　『論語集注大全』子張篇・5章に「汪氏曰く、……能く子夏の言に従事して、加ふるに時に習ふの功を以てせば、其れ庶幾からんか」とある。

【六】

○子夏曰、博學而篤志、切問而近思、仁在其中矣。

此即中庸學問思辯工夫。博學而加以篤志、則其學以誠矣。切問即審問也。近思即愼思也。思即所以辨、故不必復言明辨也。此即求仁工夫。但仁之本體乃心德也、不可以工夫言、故曰仁在其中。集註以四者之事未及乎力行而爲仁。蓋朱子本分知行爲二、故其説如此。殊不知所謂行者、只是學問思辨之功不息而已。詳見中庸私存。

『論語私存』訳注（十五）完　（水野・阿部・大場・松野）

［訓読］

○子夏曰く、博く学びて篤く志し、切に問ひて近く思ふ、仁、其の中に在り。

此れ即ち中庸の学問思弁の工夫なり。博く学びて加ふるに篤く志すことを以てすれば、則ち其の学は以て誠なり。切に問ふは、即ち審らかに問ふなり。近く思ふは、即ち慎んで思ふなり。思は、即ち弁ずる所以なり、故に必ずしも復た明弁を言はざるなり。此れ即ち仁を求むるの工夫。但だ仁の本体は乃ち心徳なり、工夫を以て言ふべからず、故に曰く、仁、其の中に在りと。集註以(おも)へらく、四者の事、未だ力行して仁を為すに及ばずと。蓋し朱子は本と知行を分けて二と為す、故に其の説、此くのごとし。殊に知らず、所謂行とは、只だ是れ学問思弁の功、息まざるのみ。詳しくは中庸私存に見ゆ。

［語釈］

○中庸學問思辯工夫　『中庸章句』19章に「博く之を学び、審かに之を問ひ、慎んで之を思ひ、明かに之を弁じ、篤く之を行ふ」とある。

○集註以四者之事未及乎力行而爲仁　『論語集注』子張篇・6章に「四者は皆な学問思弁の事のみ。未だ力行して仁を為すに及ばざるなり。然れども此に従事すれば、則ち心、外に馳せずして、存する所、自ら熟す。故に曰く、仁、其の中に在りと」とある。

○詳見中庸私存　『中庸私存』20章に「博は是れ工夫、積聚して疏遺有ること無き処。審は是れ精察する処。慎は是れ戒懼の意、其の心より遠ざかるを恐るるなり。弁は是れ心の幾□、能く理欲

を別つ処。古人に在りては、但だ之を学問と謂ふ。……四者皆な善を択ぶの事、然れども之を学と謂へば、則ち択ぶ所の善、皆な心体上より精一、善は是れ明の発用する処、故に精一は即ち是れ行なり。下文の学を以て能を言ひ、問を以て知を言ふを観れば、能者は其の知る所を能くし、知者は其の能くする所を知る。見るべし、学は即ち是れ行、而して知は即ち行の中に在るなり。思を以て得を言ひ、弁を以て明を言ふは、又た見る所謂知者は心に得るに在りて、能く理欲を弁ず、皆な能の上より精を求むるなり。篤行は但だ其の行ひて息まざらんと欲するのみ。豈に学問思弁の外、別に所謂篤行有らんや。」とある。

【七】

○子夏曰、百工居肆以成其事。君子學以致其道。

致道是爲學主意、故學必欲致其道。言人不可不學也、不致其道、便是不學矣。

［訓読］

○子夏曰く、百工は肆に居て以て其の事を成す。君子は学びて以て其の道を致す。

道を致すは是れ学を為すの主意、故に学は必ず其の道を致さんと欲す。言ふこころは、人、学ばざるべからず、其の道を致さざれば、便ち是れ学ばざるなり。

『論語私存』訳注（十五）完　（水野・阿部・大場・松野）

【八】

○子夏曰、小人之過也必文。

文則藏僞、是自欺也。

［訓読］

○子夏曰く、小人の過つや必ず文(かざ)る。

文は則ち偽りを蔵す、是れ自ら欺くなり。

［校異］

○子夏曰　底本は「子曰」に作る。『論語』本文に従い、改めた。

【九】

○子夏曰、君子有三變。望之儼然、即之也温、聽其言也厲。

厲者、斷然不遷就也。變者、隨時中節之和也。非立大本者、不能如是。

［訓読］

○子夏曰く、君子に三変有り。之を望めば儼然たり、之に即けば温なり、其の言を聴けば厲なり。

厲とは、断然として遷就せざるなり。変とは、時に随ひて節に中(あた)るの和なり。大本を立つる者に非ざれば、是くのごとくなる能はず。

［語釈］

○中節之和　『中庸章句』1章に「喜怒哀楽の未だ発せざる、之を中と謂ふ。発して皆な節に中る、之を和と謂ふ。中なる者は天下の大本なり。和なる者は天下の達道なり」とある。

【十】

○子夏曰、君子信而後勞其民。未信、則以爲厲己也。信而後諫。未信、則以爲謗己也。

此君子爲從政者而言、欲人必先誠意也。

［訓読］

○子夏曰く、君子は信ぜられて後に其の民を労す。未だ信ぜられざれば、則ち以て己を厲（や）ましむと為すなり。信ぜられて後に諫む。未だ信ぜられざれば、則ち以て己を謗ると為すなり。

此れ君子を従政者と為して言ふ、人の必ず先づ意を誠にせんことを欲するなり。

【十一】

○子夏曰、大德不踰閑、小德出入可也。

集註以小節雖或未盡合理亦無害解小德出入可也、信有弊矣。但子夏所謂小德者、對大德而言、乃全體之分也。出入、猶言往來。事來則爲出、事往則爲入。蓋大德不踰閑、則大本立矣。大本既立、則泛應曲當、

『論語私存』訳注（十五）完　（水野・阿部・大場・松野）

隨其事之往來、皆不失條理之宜、故以小德出入爲可。否則此篇所記子夏之言、皆有深造自得之實、豈不知不矜細行、終累大德、而爲此姑息之論乎。不惟子夏不當爲此言、而門人亦不得記以惑後學也。

［訓読］

○子夏曰く、大徳、閑を踰えざれば、小徳は出入するも可なり。

集註、小節、或いは未だ尽くは理に合せずと雖も亦た害無きを以て小徳は出入するも可なりを解するは、信に弊有り。但だ子夏の所謂小徳とは、大徳に対して言ふ、乃ち全体の分なり。出入は、猶ほ往来を言ふがごとし。事来れば則ち出を為し、事往けば則ち入を為す。蓋し大徳、閑を踰えざれば、則ち大本立つ。大本既に立てば、則ち泛く応じ曲さに当り、其の事の往来に随ひて、皆な条理の宜を失はず、故に小徳の出入するを以て可と為す。否らざれば則ち此の篇の記す所の子夏の言は、皆な深く造り自ら得るの実有るに、豈に細行を矜まざれば、終に大徳を累はすを知らずして、此の姑息の論を為さんや。惟だに子夏、当に此の言を為すべからざるのみならず、而して門人も亦た記して以て後学を惑はすを得ざるなり。

［語釈］

○集註以小節雖或未盡合理亦無害解小德出入可也　『論語集注』子張篇・11章に、「言ふこころは、人能く先づ其の大なる者を立つれば、則ち小節、或いは未だ尽くは理に合せずと雖も、亦た害無し」とある。

○深造自得　『孟子』離婁下篇・14章に「孟子曰く、君子、深く之に造（いた）るに道を以てするは、其の之を自得せんことを欲すればなり」とある。

○不矜細行、終累大德　『尚書』旅獒（りょごう）篇。些細な行いでも慎まないでいると、その人の大きな徳にまで悪い影響を及ぼすことを言う。

【十二】

○子游曰、子夏之門人小子、當灑掃應對進退、則可矣。抑末也。本之則無。如之何。子夏聞之曰、噫、言游過矣。君子之道、孰先傳焉、孰後倦焉。譬諸草木區以別矣。君子之道、焉可誣也。有始有卒者、其惟聖人乎。

子夏以灑掃應對進退教人、非離本也。只在事上立誠、未見其本之能爲主、則尚覺所務在末耳、故子游譏之。子夏聞之、遂發其意、以爲我不以末爲先而傳之、不以本爲後而倦教、特以其時門人小子未可以語上耳。故曰譬諸草木區以別矣。君子之道、焉可誣也。孔門學者於恕上求忠、即是此意。若聖人則全體渾然、一有感觸、無所不通。如舜聞一善言、見一善行、若決江河、沛然莫之能禦也。感觸者、機之始發、即末而言也。無所不通者、全體畢見、即本而言也。此一以貫之之道、故曰有始有卒者、其惟聖人乎。觀子夏之言、似以末爲小者、近者、本爲大者、遠者、若有先後然。然亦據其所見之小大者而言耳。其實當論末時、即有末中之本。當論本時、即有本中之末、非兩段事也。詳見説理會編卷四。

『論語私存』訳注（十五）完　（水野・阿部・大場・松野）

［訓読］

○子游曰く、子夏の門人小子は、灑掃、応対、進退に当りては、則ち可なり。抑そも末なり。之を本づくるは則ち無し。之を如何せん、と。子夏、之を聞きて曰く、噫、言游過てり。君子の道、孰れをか先にして伝へ、孰れをか後にして倦まん。諸(これ)を草木の区にして以て別あるに譬ふ。君子の道は、焉んぞ誣ふべけんや。始め有り卒り有る者は、其れ惟だ聖人か、と。

子夏、灑掃、応対、進退を以て人に教ふるは、本を離るるに非ざるなり。只だ事の上に在りて誠を立つ、未だ其の本の能く主と為るを見ざれば、則ち尚ほ務むる所は末に在るを覚(おぼ)ゆるのみ、故に子游、之を譏る。子夏、之を聞き、遂に其の意を発きて以為へらく、我、末を以て先と為して之を伝へず、本を以て後と為して教ふるを倦まず、特だ其の時の門人小子、未だ以て上を語ぐべからざるを以てするのみ。故に曰く、諸を草木の区にして以て別あるに譬ふ。君子の道は、焉んぞ誣ふべけんやと。孔門の学者、恕の上に於いて忠を求む、即ち是れ此の意。聖人のごときは則ち全体渾然、一に感触有れば、通ぜざる所無し。舜の一善言を聞き、一善行を見れば、江河を決するがごとく、沛然として之を能く禦(ふせ)ぐこと莫きがごときなり。感触とは、機の始めて発す、末に即きて言ふなり。通ぜざる所無しとは、全体畢く見はる、本に即きて言ふなり。此れ一以て之を貫くの道、故に曰く、始め有り卒り有る者は、其れ惟だ聖人かと。子夏の言を観るに、末を以て小なる者、近き者と為し、本を大なる者、遠き者と為すに似て、先後有るがごとく然り。然れども亦た其の見る所の小大なる者に拠りて言ふのみ。其の実、当に

末を論ずべき時に、即ち末中の本有り。当に本を論ずべき時に、即ち本中の末有り、両段の事に非ざるなり。詳しくは説理会編巻四に見ゆ。

［語釈］

○若聖人則全體渾然～無所不通　『孟子集注』尽心上篇・16章・注に「蓋し聖人の心は至虚至明、渾然の中、万理畢く具はる。一に感触有れば、則ち其の応、甚だ速かにして通ぜざる所無し」とあり、これを踏まえる。

○舜聞一善言～沛然莫之能禦也　『孟子』尽心上篇に、「孟子曰く、舜の深山の中に居るや、木石と居り、鹿豕と遊ぶ。其の深山の野人に異なる所以の者は幾ど希なり。其の一善言を聞き、一善行を見るに及びては、江河を決して沛然たるが若く、之を能く禦ぐこと莫きなり」とある。

○一以貫之之道　『論語』里仁篇・15章に、「子曰く、参（しん）や、吾が道は一以て之を貫く、と。曾子曰く、唯、と。子、出づ。門人、問ふて曰く、何の謂ぞや、と。曾子曰く、夫子の道は、忠恕のみ、と」とある。

○觀子夏之言　本章の本文に小（大）、遠（近）の語は見えないが、これらの語を絡めて論述するのは、前掲子張篇・4章の子夏の言「小（い）道と雖も……遠（き）を致すには……」であり、これを踏まえる。

○詳見説理會編巻四　『説理会編』巻四・教法に本章の注釈と重なる一条がある。前半三分の二は

『論語私存』訳注（十五）完　（水野・阿部・大場・松野）

おおよそ本章と同文であり、末尾の「両段の事に非ざるなり」に続けて次のように記す。「程子曰く、凡そ物に本末の分かつべからざる有り、本末を両段の事と為すは、蓋し精誠の聚むる所の者を本と為し、萌芽の達する所の者を末と為す。之を木に譬ふれば、根よりして幹、而して枝、而して葉、而して萌芽の透徹、未だ機を停むること有らず。其の萌芽の達する所は、即ち其の精誠の聚まる所なり。故に本に即して言へば、末は本に在り。末に即して言へば、本は末に在り、実に体用の相ひ離れざる者なり。但だ小大、殊を分かち、其の進むに漸有れば、則ち学ぶ者は等を躐ゆる能はざること有り。先づ伝ふるに小なる者、近き者を以てするは、末に即して以て本を求む、万殊の一本なる所以なり。後に教ふるに大なる者、遠き者を以てするは、本に即して以て末に会す、一本の万殊なる所以なり。此を知れば則ち忠恕一貫の旨、以て疑ひ無かるべきなり」とあり、季本の説は程子の説を踏まえているのがわかる。

［校異］

○遠者若有先後然　『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）は「有」を欠く。

【十三】

○子夏曰、仕而優則學、學而優則仕。

此爲已仕者而發。仕而優者、謂其才有餘裕、足以任事也。然必資學以廣才。學者、考之古訓、質之先覺

以精於事理也。如此則人不可不學矣。故遂推言仕所以優者、實本於學、學而優然後可仕也。二語雖平、所重在學。新安陳氏之説大略得之。○仕而優與學而篇行有餘力不同。蓋彼以日之暇言、此以才之裕言。

［訓読］

○子夏曰く、仕へて優なれば則ち学び、学びて優なれば則ち仕ふ。

此れ已に仕ふる者の為にして発す。仕へて優なる者は、其の才に余裕有り、以て事に任ずるに足るを謂ふなり。然れども必ず学に資(よ)りて以て才を広くす。学ぶ者は、之を古訓に考へ、之を先覚に質(ただ)して以て事理を精にするなり。此くのごとくなれば則ち人は学ばざるべからず。故に遂に推して仕へて優なる所以の者は、実に学に本づき、学びて優にして然る後に仕ふべしと言ふなり。二語、平なりと雖も、重んずる所は学に在り。新安陳氏の説、大略、之を得たり。○仕へて優なると学而篇の行ひて余力有りと同じからず。蓋し彼は日〻の暇を以て言ひ、此は才の裕を以て言ふ。

［語釈］

○新安陳氏之説大略得之　『論語集注大全』子張篇・13章に「新安陳氏曰く、仕ふる者は、先づ仕ふるの事を尽す、余力有れば則ち益ます学に及ぶ。学ぶ者は、先づ学の事を尽す、余力有れば則ち始めて仕に及ぶ」とある。

○學而篇行有餘力　『論語』学而篇・6章に、「子曰く、弟子入りては則ち孝、出でては則ち悌、謹しんで信あり、衆を愛するを汎くして仁に親づけ、行ひて餘力有れば、則ち以て文を学ばん」

『論語私存』訳注（十五）完　（水野・阿部・大場・松野）

とある。季本は、學而篇の「行ひて余力有れば」は時間的な余裕のことをいい、本章の「仕へて優なれば」は才能に余裕のあることをいうと解釈する。

【十四】

○子游曰、喪致乎哀而止。

而止、因過毀者而言、非謂略禮文也。南軒張氏曰、喪主乎哀。致者自盡之意。若毀生滅性、則是過乎哀者也。此言得之。

［訓読］

○子游曰く、喪は哀を致して止む。

而して止むは、過ぎて毀つ者に因りて言ふ、礼もて文(かざ)るを略するを謂ふに非ざるなり。南軒張氏曰く、喪は哀を主とす。致すとは自ら尽くすの意なり。生を毀ち性を滅するがごときは、則ち是れ哀に過ぎたる者なり、と。此の言、之を得たり。

［語釈］

○南軒張氏曰～則是過乎哀者也　『論語集注大全』子張篇・14章。

【十五】

○子游曰、吾友張也、爲難能也。然而未仁。

此即下章堂堂之意。觀子游譏子張之言、則子游時已近裏着己。而子張謂士以見危授命、見得思義、祭思敬、喪思哀爲可。及謂執德不弘、信道不篤、爲焉能有亡、則後於子游而始不外馳□。此篇所記、多子張、子夏、子游之言、皆見三子之能□本實也。然而孟子滕文公上篇載孔子沒、而三子□以所事夫子事有若、則以有若之智足以知聖人之汗、而己之高明未及耳。及曾子以爲不可、則謂聖人之學、不必於言語上求之、欲其於所已能者、充實以有光輝□□□。

［訓読］

○子游曰く、吾が友張や、能くし難きを為す。然れども未だ仁ならず。

此れ即ち下章の堂堂たるの意なり。子游が子張を譏るの言を観れば、則ち子游、時にして已に裏に近づき己に着く。而して子張は謂ふ、士は以て危きを見ては命を授け、得るを見ては義を思ひ、祭には敬を思ひ、喪には哀を思ひ、可たるのみと。徳を執ること弘からず、道を信ずること篤からざれば、焉んぞ能く有り亡しと為さんと謂ふに及べば、則ち子游に後れて始めて外に馳せず。此の篇の記す所、子張、子夏、子游の言多く、皆な三子の能く本実に務むるを見(しめ)すなり。然れども孟子滕文公上篇に載す孔子没して、三子、夫子に事ふる所を以て有若に事へんと欲するは、則ち有若の智は以て聖人の汗を知るに足り、而して己の高明は未だ及ばざるを以てするのみ。曾子以て不可と為すに及びては、則ち謂へらく、聖人の学は、必ずしも言語の上に於て之を求めず、其の已に能くする所の者に於て、充実して以て光輝

『論語私存』訳注（十五）完　（水野・阿部・大場・松野）

有らしめんと欲するのみと。

［語釈］

○下章堂堂之意　『論語』子張篇・16章。後出。

○士以見危授命、見得思義、祭思敬、喪思哀爲可　『論語』子張篇・1章。

○執德不弘、信道不篤、爲焉能有亡　『論語』子張篇・2章による。

○孟子滕文公上篇載孔子沒、而三子欲以所事夫子事有若／及曾子以為不可　『孟子』滕文公上篇・4章に「昔者、孔子の没するや、三年の外、門人任を治めて将に帰らんとす。……他日、子夏、子張、子游は、有若の聖人に似たるを以て、孔子に事ふる所を以て之に事へんと欲し、曾子に彊う。曾子曰く、不可なり。江漢以て之を濯ひ、秋陽以て之を暴す。皜皜乎として尚ふべからざるのみと」とある。

○以有若之智足以知聖人之汙、而己之高明未及耳　『孟子』公孫丑上篇・2章に「宰我、子貢、有若は、智を以て聖人を知るに足る。汙りて其の好みする所に阿るに至らず」とあるのに基づく。が、季本の誤認がある。「公孫丑上篇」にあるこの文は、そこで「宰我、子貢、有若、智足以聖人、汙不至阿其所好。」とあるように、有若だけではなく、宰我、子貢を含めて三人のことである。しかも「汙」はもともと難解だが、「……聖人、汙……」と「聖人」の前で切って読むのが一般的で、古注、新注とも「下」と解する。謙遜の意味であろうし、以下は三人のことのようだ。

季本の場合、「汙」は聖人（孔子）のこととなる。が、やはり「下」、謙遜と解してよいのであろう。この前文に孔子の言に、「我於辞命則不能也」とか、「聖則吾不能、……」が根拠となる。有若は聖人孔子の真の謙遜の意味をすぐ理解していた（宰我や子貢も同様となるのだが）、それが子張、子貢、子游が彼を推した理由と季本は考えたようだ。

［校異］

○始不外馳□　『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）は「始不外馳矣」に作る。

○皆見三子之能□本實也　『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）は「皆見三子之能務本實也」に作る。

○而三子□以所事夫子事有若　『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）は「而三子欲以所事夫子事有若」に作る。

○充實以有光輝□□□　『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）は「充實以有光輝而已矣」に作る。

【十六】

○曾子曰、堂堂乎張也。難與並爲仁矣。

此言與之爲仁則無益而有損、所重在於取友輔仁。未必便謂子張不足爲仁也。

『論語私存』訳注（十五）完　（水野・阿部・大場・松野）

［訓読］

○曾子曰く、堂堂たるかな張や。与に並びて仁を為し難し。

此れ之と仁を為せば則ち益無くして損有り、重んずる所は友を取りて仁を輔くるに在るを言ふ。未だ必ずしも便ち子張は仁を為すに足らずと謂はざるなり。

［語釈］

○取友輔仁　『論語』顔淵篇・24章に、「曾子曰く、君子は文を以て友を会し、友を以て仁を輔く、と」とある。

【十七】

○曾子曰、吾聞諸夫子。人未有自致者也。必也親喪乎。

胡氏曰、父母之喪、哀痛慘怛、蓋眞情之不能自已者。聖人指以示人、使之自識其良心。非專爲喪禮發也。

［訓読］

○曾子曰く、吾、諸（これ）を夫子に聞けり。人、未だ自ら致す者有らざるなり。必ずや親の喪か。

胡氏曰く、父母の喪、哀痛慘怛するは、蓋し真情の自ら已む能はざる者ならん。聖人、指して以て人に示し、之をして自ら其の良心を識らしむ。専ら喪礼の為に発するに非ざるなり、と。

［語釈］

○胡氏曰～非專為喪禮發也　『論語集注大全』子張篇・17章。

【十八】

○曾子曰、吾聞諸夫子。孟莊子之孝也、其他可能也。其不改父之臣與父之政、是難能也。

莊子父獻子、魯賢臣也。其臣必賢、其政必善。獻子既沒。莊子得以自專。苟非欲繼父志而爲善、則其臣與事必有與己相拂者、焉能不改。於此不改、則志在立身行道、乃孝之大者。其他喪禮之事、人所易能、不足以爲難也。此與學而篇三年無改父道者不同。蓋三年無改、本其不忍之心、言三年之後、有可改者、猶必改之。此章所言、則因父之賢、而終身無改之事也。

［訓読］

○曾子曰く、吾、諸を夫子に聞けり。孟莊子の孝や、其の他は能くすべきなり。其の父の臣と父の政とを改めざるは、是れ能くし難きなり。

莊子の父献子は、魯の賢臣なり。其の臣必ず賢なれば、其の政必ず善なり。献子、既に没す。莊子以て自ら専らにするを得。苟しくも父の志を継ぎて善を為さんと欲するに非ざれば、則ち其の臣、事を与にするに必ず己と相ひ払(そむ)く者有り、焉んぞ能く改めざらんや。此に於て改めざるは、則ち志、身を立てて道を行ふに在りて、乃ち孝の大なる者なればなり。其の他喪礼の事、人の能くし易き所、以て難しと為すに足らざるなり。此れ学而篇の三年、父の道を改むる無き者と同じからず。蓋し三年、改むる無

『論語私存』訳注（十五）完　（水野・阿部・大場・松野）

きは、其の忍びざるの心に本づき、三年の後は、改むべき者有れば、猶ほ必ず之を改むるを言ふ。此の章の言ふ所は、則ち父の賢に因りて、終身、改むる無きの事なり。

［語釈］

○立身行道、乃孝之大者　『孝経』開宗明義章に「身を立て道を行ひ、名を後世に揚げ、以て父母を顕す、孝の終なり」とあるのを踏まえる。

○學而篇三年無改父道　『論語』学而篇・11章に、「子曰く、父在せば其の志を観、父没すれば其の行ひを観る。三年、父の道を改むること無きを、孝と謂ふべし、と」とある。

【十九】

○孟氏使陽膚爲士師。問於曾子。曾子曰、上失其道、民散久矣。如得其情、則哀矜而勿喜。

南軒張氏曰、先王之於民、所以養之教之者、無所不用其極。故民心親附其上、服習而不違。如是而猶有不率焉、而後刑罰加之。蓋未嘗不致哀矜惻怛也。若夫後世禮義衰微、所以養之教之者、皆蕩而不存矣、上之人未嘗心乎民也。故民心亦渙散而不相屬、以陥於罪戻、而蹈於刑戮。此所謂上失其道、民散久矣。方是時、任士師之職者、獄訟之際、其可以得情爲喜乎。蓋當深省所以使民至於此極者、以極其哀矜之意焉、可也。能存此心、則有以仁乎斯民矣。此説最善。

［訓読］

○孟氏、陽膚をして士師たらしむ。曾子に問ふ。曾子曰く、上、其の道を失ひ、民、散ずること久し。如し其の情を得れば、則ち哀矜して喜ぶこと勿かれ。

南軒張氏曰く、先王の民に於ける、之を養ひ、之を教ふる所以の者は、其の極を用ひざる所無し。故に民心、其の上に親附し、服習して違はず。是くのごとくして猶ほ率はざること有りて、而る後に刑罰、之に加ふ。蓋し未だ嘗て哀矜惻怛を致さずんばあらざるなり。若し夫れ後世、礼義の衰微するは、之を養ひ、之を教ふる所以の者、皆な蕩して存せず、上の人、未だ嘗て民に心あらざればなり。故に民心も亦た渙散して相ひ属せず、以て罪戻に陥りて、刑戮を踏む。此れ所謂、上、其の道を失ひて、民、散ずること久し。是の時に方りて、士師の職に任ずる者、獄訟の際、其れ情を得るを以て喜びと為すべけんや。蓋し当に深く民をして此の極に至らしむる所以の者を省みるべく、以て其の哀矜の意を極むれば、可なり。能く此の心を存せば、則ち以て斯の民を仁すること有らん、と。此の説、最も善し。

［語釈］

○南軒張氏曰～則有以仁乎斯民矣　『論語集注大全』子張篇・19章。

【二十】

○子貢曰、紂之不善、不如是之甚也。是以君子惡居下流。天下之惡皆歸焉。

居下流則日趨於惡、故曰天下之惡皆歸焉。○南軒張氏曰、紂不道、極矣。其始亦未至若是之甚、惟其爲

不善、而天下之惡皆歸之、日累月成、以至貫盈。豈不猶川澤居下、而衆水歸之乎。此説得之。

［訓読］

○子貢曰く、紂の不善は、是くのごとくきの甚だしきならざるなり。是を以て君子は下流に居ることを悪む。天下の悪、皆な焉に帰すればなり。

下流に居れば、則ち日に悪に趨る、故に曰く、天下の悪、皆な焉に帰す、と。○南軒張氏曰く、紂の不道、極まれり。其の始めは亦た未だ是くのごときの甚だしきに至らず、惟だ其れ不善を為して、天下の悪、皆な之に帰し、日に累なり月に成りて、以て貫盈するに至る。豈に猶ほ川沢の下に居りて、衆水の之に帰するがごとくならざらんや、と。此の説、之を得たり。

［語釈］

○南軒張氏曰～而衆水歸之乎　『論語集注大全』子張篇・20章。

【二十一】

○子貢曰、君子之過也、如日月之食焉。過也、人皆見之。更也、人皆仰之。

此誘人改過之言也。○南軒張氏曰、人皆見之者、君子不文飾掩蔽其過。日月之食、旋而復矣、無損其明也。故君子改過不吝、而德愈光焉。此説得之。

［訓読］

○子貢曰く、君子の過つや、日月の食のごとし。過つや、人皆な之を見る。更むるや、人皆な之を仰ぐ。

此れ人を誘ひて過ちを改めしむるの言なり。○南軒張氏曰く、人皆な之を見るとは、君子は文飾して其の過ちを掩蔽せざればなり。日月の食は、旋りて復る、其の明を損すること無きなり。故に君子は過ちを改むるや吝まず、而して徳、愈いよ光けり、と。此の説、之を得たり。

［語釈］

○南軒張氏曰～而徳愈光焉　『論語集注大全』子張篇・21章。

【二十二】

○衛公孫朝問於子貢曰、仲尼焉學。子貢曰、文武之道、未墜於地、在人。賢者識其大者、不賢者識其小者。莫不有文武之道焉。夫子焉不學、而亦何常師之有。

文武之道、未墜於地、謂猶有聞而知之。大、謂大德、性命之微是也。小、謂小德、事物之理是也。賢謂德已成者、不賢謂德未及於已成者。識、知也。焉不學、謂隨其賢者不賢者而學之、則其師亦無常矣。新安陳氏曰、焉學、問何所從學。焉不學、言何所不從學。

［訓読］

○衛の公孫朝、子貢に問ふて曰く、仲尼は焉くにか学べる。子貢曰く、文武の道、未だ地に墜ちずして、人に在り。賢者は其の大なる者を識り、不賢者は其の小なる者を識る。文武の道有らざること莫し。夫子、

『論語私存』訳注（十五）完　（水野・阿部・大場・松野）

焉くにか学ばざらん、而して亦た何の常師か之れ有らん。

文武の道、未だ地に墜ちざるは、猶ほ聞く有りて之を知るを謂ふ。大は、大徳を謂ふ、性命の微、是れなり。小は、小徳を謂ふ、事物の理、是れなり。賢は、徳の已に成る者を謂ひ、不賢は、徳の未だ已に成るに及ばざる者を謂ふ。識は、知るなり。焉くにか学ばざるは、其の賢者、不賢者に随ひて之を学べば、則ち其の師も亦た常無きを謂ふ。新安陳氏曰く、焉くにか学びたるとは、何れの所に従学するかを問ふ。焉くにか学ばざらんとは、何れの所にか従学せざらんを言ふ、と。

［語釈］

○新安陳氏曰～焉何所不従學　『論語集注大全』子張篇・22章。

［校異］

○性命之微是也　『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）は「性命之徵、是也」に作る。

【二十三】

○叔孫武叔語大夫於朝曰、子貢賢於仲尼。子服景伯以告子貢。子貢曰、譬之宮牆、賜之牆也及肩。窺見室家之好。夫子之牆數仞。不得其門而入、不見宗廟之美、百官之富。得其門者或寡矣。夫子之云、不亦宜乎。

小而發露則易窺、大而含蓄則難見。此子貢以牆室取譬之意也。子貢文章外見、而孔子道德闇然。故武叔以子貢爲賢於仲尼。入門之説、雙峰饒氏以爲聖人之道、雖曰難入、然其入亦自有方。且如仰彌高、鑽彌

堅、此是數仞難入處。夫子循循善誘、博我以文、約我以禮、這便是從入之門。學者須從此門路入、方有所見。可謂詳盡矣。

［訓読］

○叔孫武叔、大夫に朝に語りて曰く、子貢は仲尼より賢れり。子服景伯、以て子貢に告ぐ。子貢曰く、之を宮牆に譬ふれば、賜の牆や肩に及ぶ。室家の好きを窺ひ見る。夫子の牆は数仞なり。其の門を得て入らざれば、宗廟の美、百官の富を見ず。其の門を得る者、或いは寡なし。夫子の云へること、亦た宜ならずや。

小にして発露すれば則ち窺ひ易し、大にして含蓄すれば則ち見難し。此れ子貢の牆室を以て譬へを取るの意なり。子貢の文章、外に見はるれども、孔子の道徳は闇然たり。故に武叔は子貢を以て仲尼より賢れりと為す。門に入るの説、双峰饒氏以為へらく、聖人の道は、入り難しと曰ふと雖も、然れども其の入るも亦た自ら方有り。且へば仰げば弥いよ高く、鑽れば弥いよ堅きがごとし、此れは是れ数仞、入り難き処なり。夫子、循循として善く誘ひ、我を博むるに文を以てし、我を約するに礼を以てす、這れ便ち是れ従りて入るの門なり。学ぶ者、此の門路より入るを須ちて、方めて見る所有らん、と。詳しく尽くすと謂ふべし。

［語釈］

○雙峰饒氏以爲〜方有所見　『論語集注大全』子張篇・23章。

『論語私存』訳注（十五）完　（水野・阿部・大場・松野）

○仰彌高、鑽彌堅　『論語』子罕篇・10章に「顔淵、喟然として歎じて曰く、之を仰げば弥いよ高く、之を鑽れば弥いよ堅し」とある。

○夫子循循善誘、博我以文、約我以禮　『論語』子罕篇・10章に「夫子、循循然として善く人を誘ふ。我を博むるに文を以てし、我を約するに礼を以てす」とある。

［校異］

○譬之宮牆　底本は「譬之宮墻」に作る。『論語』本文に従い、改めた。

【二十四】

○叔孫武叔毀仲尼。子貢曰、無以爲也。仲尼不可毀也。他人之賢者丘陵也。猶可踰也。仲尼日月也。無得而踰焉。人雖欲自絶、其何傷於日月乎。多見其不知量也。

丘陵、有迹之物而凝於下、故可踰。日月、圓明之體而運於上、故不可踰。此以高言、謂孔子乃至高之明也。何傷於日月、謂無損於明。此則以明言、而非謂其高矣。南軒張氏曰、泰山雖高、然猶有可踰之理。至於日月之行天、則孰得而踰之哉。人之議日月者、初何損於日月之明。徒爲自絶於日月而已矣。此説得之。○觀子貢及下章陳子禽皆謂孔子爲仲尼、則可見古者以字爲通稱矣。

［訓読］

○叔孫武叔、仲尼を毀る。子貢曰く、以て為す無きなり。仲尼は毀るべからざるなり。他人の賢者は丘陵

なり。猶ほ踰ゆべきなり。仲尼は日月なり。得て踰ゆる無し。人、自ら絶たんと欲すと雖も、其れ何ぞ日月を傷らんや。多に其の量を知らざるを見すなり。

丘陵は、有迹の物にして下に凝る、故に踰ゆべし。日月は、円明の体にして上を運る、故に踰ゆべからず。此れ高きを以て言ひて、孔子は乃ち至高の明なるを謂ふなり。何ぞ日月を傷らんやとは、明を損ふ無きを謂ふ。此れ則ち明を以て言ひて、其の高きを謂ふに非ず。南軒張氏曰く、泰山は高きと雖も、然れども猶ほ踰ゆべきの理有り。日月の天を行るに至りては、則ち孰か得て之を踰へんや。人の日月を議する者は、初めより何ぞ日月の明を損はん。徒らに為して自ら日月に絶たるのみ、と。此の説、之を得たり。○子貢及び下章の陳子禽を観るに、皆な孔子を謂ひて仲尼と為すは、則ち古者、字を以て通称と為すを見るべし。

［語釈］

○南軒張氏曰～徒爲自絶於日月而已矣　『論語集注大全』子張篇・24章。

【二十五】

○陳子禽謂子貢曰、子爲恭也、仲尼豈賢於子乎。子貢曰、君子一言以爲知、一言以爲不知。言不可不慎也。夫子之不可及也、猶天之不可階而升也。夫子之得邦家者、所謂立之斯立、道之斯行、綏之斯來、動之斯和。其生也榮、其死也哀。如之何其可及也。

『論語私存』訳注（十五）完　（水野・阿部・大場・松野）

由工夫進者、自士而賢、自賢而聖、此階級也。聖而既至、則非階級可升矣。○立之斯立、猶欲立而立人。道之斯行、猶欲達而達人也。立達説見雍也篇。來、以化行言。和、以化成言。子貢晩年見用於魯、毎以言語説隣國有功、魯人賢之、故叔孫武叔以爲賢於仲尼。子禽推尊子貢、亦武叔之見也。故以夫子得邦家之功化曉之。不然、則如他日論温良恭儉讓之德斯已矣。

［訓読］

○陳子禽、子貢に謂ひて曰く、子は恭を為すなり。仲尼、豈に子よりも賢らんや。子貢曰く、君子は一言以て知と為し、一言以て不知と為す。言は慎まざるべからざるなり。夫子の及ぶべからざるや、猶ほ天の階して升るべからざるがごときなり。夫子の邦家を得んには、所謂、之を立つれば斯に立ち、之を道けば斯に行き、之を綏んずれば斯に来り、之を動かせば斯に和らぐ。其の生くるや栄へ、其の死するや哀しむ。之を如何ぞ其れ及ぶべけんや。

工夫によりて進む者は、士よりして賢、賢よりして聖、此れ階級なり。聖にして既に至るは、則ち階級の升るべきに非ず。○之を立つれば斯に立つとは、猶ほ立たんと欲して人を立つるがごとし。之を道けば斯に行くとは、猶ほ達せんと欲して人を達するがごときなり。立、達の説は雍也篇に見ゆ。来は、化の行るを以て言ふ。和は、化の成るを以て言ふ。子貢は晩年に魯に用ひられ、毎に言語を以て隣国を説きて功有り、魯人、之を賢とす、故に叔孫武叔は以て仲尼よりも賢ると為す。子禽の子貢を推尊するも、亦た武叔の見なり。故に夫子の邦家を得るの功化を以て之を曉す。然らざれば、則ち他日のごと

く温良恭倹譲の徳を論じて、斯に已まん。

［語釈］

○立達説見雍也篇　「『論語私存』訳注（六）」雍也篇・30章参照。

○叔孫武叔以爲賢於仲尼　『論語』子張篇・23章に「叔孫武叔、大夫に朝に語りて曰く、子貢は仲尼より賢れり」とある。

○他日論温良恭倹譲之徳斯已矣　『論語』學而篇・10章に「子禽、子貢に問ひ曰く、夫子の是の邦に至るや、必ず其の政を聞く。之を求めたるか、抑そも之を与へたるか。子貢曰く、夫子は温良恭倹譲、以て之を得たり。夫子の之を求むるや、其れ諸人の之を求むるに異なるか」とある。子貢が孔子より賢っていると言った子禽の主張は、武叔に影響されたもので、それゆえ武叔に反論したのと同様の言い方をした（孔子が政治的にもいかに秀れた能力の持ち主であったかを声高に強調すること）。もしそうでなければ他日（学而篇での子禽の問いに対する応答）のように、孔子の人格的側面をやんわり推奨する程度で済ませていたであろうということ。

論語私存巻十九終

『論語私存』訳注（十五）完　（水野・阿部・大場・松野）

論語私存巻二十

堯曰第二十

會稽季本箋釋

【一】

堯曰、咨爾舜、天之曆數在爾躬。允執其中。四海困窮、天祿永終。舜亦以命禹。

此堯舜禹得天下之事也。堯之命舜、言天命歸於有德。中者德之無過不及也。故使之信執其中。常存而不失、謂之執。執豈塊然執着一物哉。

［訓読］

堯曰く、咨(ああ)爾舜、天の曆数、爾の躬に在り。允に其の中を執れ。四海困窮すれば、天祿永く終えん、と。舜も亦た以て禹に命ず。

此れ堯、舜、禹、天下を得るの事なり。堯の舜に命ずるは、天命の有德に帰するを言ふ。中とは德の過不及無きなり。故に之をして信に其の中を執らしむ。常に存して失はざる、之を執と謂ふ。執は豈に塊然として一物に執着せんや。

［語釈］

○此堯、舜、禹、得天下之事　季本がこのように述べたのは、『論語』当該章をもとに偽作された、

『偽古文尚書』「虞書」「大禹謨」の「天の暦数、汝の躬に在り。汝終に元后に陟れ。人心惟れ危く、道心惟れ微なり。惟れ精、惟れ一、允に厥の中を執れ……四海困窮すれば、天禄永く終へん」を根拠としている。

［校異］

○故使之信執其中　底本は「故使之信執此中」に作る。『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）に従い、改めた。

曰、予小子履、敢用玄牡、敢昭告于皇皇后帝。有罪不敢赦、帝臣不蔽、簡在帝心。朕躬有罪、無以萬方。萬方有罪、罪在朕躬。

此成湯得天下之事也。言夏桀有罪而不敢赦、帝臣有德而不敢蔽、即易所謂遏惡揚善、順天休命。故曰、簡在帝心。此自述其初請命伐桀之辭、以告諸侯也。故其告諸侯之辭則曰、天之立君、使居民上、欲其脩己、以化民也。凡民有未善、皆君之罪而不敢以責民。亦順天命之意。

［訓読］

曰く、予れ小子履、敢へて玄牡を用ひて、敢へて昭らかに皇皇たる后帝に告ぐ。罪有るは敢へて赦さず、帝臣は蔽はず、簡ぶこと帝の心に在り。朕が躬に罪有れば、万方を以てすること無かれ。万方に罪有れば、罪は朕が躬に在り、と。

『論語私存』訳注（十五）完　（水野・阿部・大場・松野）

此れ成湯、天下を得るの事なり。夏桀罪有りて敢へて赦さず、帝臣徳有りて敢へて蔽はずと言ふは、即ち易に所謂、悪を遏めて善を揚げ、天の休命に順ふなり。故に曰く、簡ぶこと帝の心に在り、と。此れ自ら其の初めに桀を伐つを命ぜんことを請ふの辞を述べ、以て諸侯に告ぐるなり。故に其の諸侯に告ぐるの辞に則ち曰く、天の君を立て、民の上に居らしむるは、其の己を脩め、以て民を化せんことを欲するなり。凡そ民に未だ善ならざること有れば、皆な君の罪にして、敢へて以て民を責めず、と。亦た天命に順ふの意なり。

［語釈］

○遏惡揚善、順天休命　『易経』「大有」「象伝」大象。

○順天命也　『易経』「萃」「彖伝」。

周有大賚。善人是富。雖有周親、不如仁人。百姓有過、在予一人。謹權量、審法度、修廢官、四方之政行焉。興□□、繼絶世、舉逸民、天下之民歸心焉。所重民食喪祭。

此武王得天下之事也。大賚謂天下之有德者皆使之居位而食祿。此即善人是富也。雖有周親、不如仁人、見所以富善人之意。南軒張氏曰、如周公雖至親、亦以尊賢之義爲重也。此説微與集註不同。然有意味。所以然者、君道主於化民、欲以用賢圖治。民有不善、其過在君、亦猶成湯所謂萬方有罪、罪在朕躬也。蔡氏書傳以過訓責。各爲一義耳。權量曰謹使得其平也。法度曰審使得其當也。廢官謂雖有其官、而徒擁

虚名者、則使之實修其職也。此政行於國中、而因以及四方。如此則民得息爭矣。滅國者先王封國、上世皆有功德、而爲人所滅。故復繼之。絶世、國雖未滅而其世絶者、亦幾乎滅矣。則求其人而爲之立後。逸民如箕子、商容之類。此民心之所欲而足以樹風聲者也。食喪祭重之、則養生喪死可以無憾也。既以此得民心、則王道行而教化洽矣。〇雙峯饒氏曰、周有大賚以下、夫子零碎収拾。或擧其辭、或述其事、湊成武王一段事實。

［訓読］

周に大賚有り。善人是れ富む。周親有りと雖も、仁人に如かず。百姓過ち有れば、予一人に在り。権量を謹み、法度を審らかにし、廃官を修むれば、四方の政行はる。滅国を興し、絶世を継ぎ、逸民を挙ぐれば、天下の民、心を帰す。重んずる所は、民、食、喪、祭なり。

此れ武王、天下を得るの事なり。大賚は天下の徳有る者、皆な之をして位に居りて禄を食ましむるを謂ふ。此れ即ち善人是れ富むなり。周親有りと雖も、仁人に如かずとは、善人を富ます所以の意を見すなり。南軒張氏曰く、周公は至親と雖も、亦た賢を尊ぶの義を以て重しと為すが如し、と。此の説、微しく集註と同じからず。然れども意味有り。然る所以の者は、君道は民を化するを主とし、以て賢を用ひ治を図らんと欲すればなり。民に不善あれば、其の過ちは君に在り、亦た猶ほ成湯の所謂、万方に罪有れば、罪は朕が躬に在りのごとし。蔡氏書伝、過を以て責と訓ず。各おの一義を為すのみ。権量を謹と曰ふは、其の平を得しむるなり。法度を審と曰ふは、其の当を得しむるなり。廃官は、其の官有

『論語私存』訳注（十五）完　（水野・阿部・大場・松野）

りと雖も、而れども徒らに虚名を擁する者なれば、則ち之をして実に其の職を修めしむるを謂ふ。此の政、国中に行われて、因りて以て四方に及ぶ。此くのごとくなれば、則ち民、争ひを息むを得るなり。滅国とは、先王の封国、上世皆な功徳有れども、人の滅ぼす所と為る。故に復た之を継がしむ。絶世は、国未だ滅びずと雖も、而れども其の世絶ゆる者にして、亦た滅ぶるに幾し。則ち其の人を求めて、之が為に後を立つ。逸民は、箕子、商容の類のごとし。此れ民心の欲する所にして、以て風声を樹つるに足る者なり。食、喪、祭は之を重んずれば、則ち生を養ひ死を喪して、以て憾み無かるべきなり。既に此れを以て民心を得れば、則ち王道行はれて、教化洽し。○双峯饒氏曰く、周に大賚有り以下、夫子、零砕に収拾す。或いは其の辞を挙げ、或いは其の事を述べ、武王一段の事実を湊成す、と。

［語釈］

○南軒張氏曰　『論語集注大全』堯曰篇・1章。

○微與集註不同　『論語集注』堯曰篇・1章に「紂は至親多しと雖も、周家の仁人多きに如かず」とある。

○蔡氏書傳　『書経』「泰誓」中の蔡沈の伝に「過は広韻に責なり。武王言へらく、天の視聴は皆な民よりす。今、民皆な我を責めて、我、商の罪を正さずと謂ふこと有り。民心を以て天意を察すれば、則ち我の商を伐つ、断じて必ず往かん、と。蓋し百姓、紂の虐を畏れて周の深きを望み、而して武王の己を水火より拯ふに即かざるを責む。湯の東面して征すれば西夷怨み、南面して征

すれば北狄怨むの意のごとし」とある。

○養生喪死可以無憾　『孟子』梁恵王上篇・3章に「生を養ひ死を喪して憾み無きは、王道の始めなり」とある。

○雙峯饒氏曰～武王一段事實　『論語集注大全』堯曰篇・1章。

［校異］

○興□□　『論語』本文にもとづき「興滅國」とした。

寛則得衆、信則民任焉。敏則有功。公則説。

上叙四聖人之事、以明聖學之所傳有。自此則泛言帝王之治道也。○朱子曰、此聖人誦述前聖之言、弟子類記於此。又曰、此篇多闕文。當各本其所出而解之。有不可通者、闕之可也。

［訓読］

寛なれば則ち衆を得、信なれば則ち民任ず。敏なれば則ち功有り。公なれば則ち説ぶ。

上、四聖人の事を叙べ、以て聖学の伝へ有つ所を明らかにす。此れよりは則ち帝王の治道を泛言するなり。○朱子曰く、此れ聖人、前聖の言を誦述して、弟子此に類記す、と。又た曰く、此の篇、闕文多し。当に各おの其の出づる所に本づきて之を解すべし。通ずべからざる者有れば、之を闕くも可なり、

『論語私存』訳注（十五）完　（水野・阿部・大場・松野）

と。

［語釈］

○朱子曰～類記於此　『論語集注大全』堯曰篇・1章。

○又曰～闕之可也　『論語集注大全』堯曰篇・1章。

【二】

○子張問於孔子曰、何如斯可以從政矣。子曰、尊五美、屏四惡、斯可以從政矣。子張曰、何謂五美。子曰、君子惠而不費、勞而不怨、欲而不貪、泰而不驕、威而不猛。子張曰、何謂惠而不費。子曰、因民之所利而利之、斯不亦惠而不費乎。擇可勞而勞之、又誰怨。欲仁而得仁、又焉貪。君子無衆寡、無小大、無敢慢。斯不亦泰而不驕乎。君子正其衣冠、尊其瞻視、儼然人望而畏之。斯不亦威而不猛乎。子張曰、何謂四惡。子曰、不教而殺謂之虐、不戒視成謂之暴、慢令致期謂之賊、猶之與人也出納之吝謂之有司。

惠勞欲泰威、非不費不怨不貪不驕不猛不可以爲美。利因乎民、故惠不爲費。勞擇其可、故勞不致怨。仁非私己、故欲不爲貪。忘物而不慢於心、故泰不爲驕。肅容而不作於色、故威不爲猛。惠以民財言。勞以民力言。不費民財、不勞民力、非仁不能也。故繼之以仁。由是而臨民、又當安舒莊敬則傲慢粗暴之気不形。故又繼之以泰威之美。此五美所列之序也。○不教而殺以民言。不戒視成以事言。此二者皆苛急之惡也。慢令致期謂令不嚴而事不能應期也。出納之吝謂出納之際、如有司之守財吝而不發也。如此則遲疑不

決致失事機矣。此二者皆怠緩之惡也。○子張至此必學已就實。故孔子因其問從政、而歷數其事以告之。

比於問行問達問政之時、專使反求於内者、漸擴充矣。

［訓読］

○子張、孔子に問ひて曰く、何如なれば斯れ以て政に従ふべき、と。子曰く、五美を尊び、四悪を屏くれば、斯に以て政に従ふべし。子張曰く、何をか五美と謂ふ、と。子曰く、君子は恵にして費やさず、労して怨みず、欲して貪らず、泰にして驕らず、威あつて猛からず。子張曰く、何をか恵にして費やさずと謂ふ、と。子曰く、民の利する所に因りて之を利すれば、斯れ亦た恵して費やさざるにあらずや。労すべきを択びて之を労すれば、又た誰をか怨みん。仁を欲して仁を得れば、又た焉んぞ貪らん。君子は衆寡と無く、小大と無く、敢へて慢ること無し。斯れ亦た泰にして驕らざるにあらずや。君子は其の衣冠を正しくし、其の瞻視を尊び、儼然として人望みて之を畏る。斯れ亦た威ありて猛からざるにあらずや。子張曰く、何をか四悪と謂ふ、と。子曰く、教へずして殺す、之れを虐と謂ひ、戒めずして成るを視る、之を暴と謂ひ、令を慢りにして期を致す、之を賊と謂ひ、之れを猶(ひと)しくして人に与ふるに、出納の吝なる、之れを有司と謂ふ。

恵、労、欲、泰、威は、費やさず、怨みず、貪らず、驕らず、猛からざるに非ざれば、以て美と為すべからず。利は民に因る、故に恵して費やすを為さず。労は其の可を択ぶ、故に労して怨みを致さず。仁は私己に非ず、故に欲は貪ると為さず。物を忘れて心を慢りにせず、故に泰は驕りと為さず。容を粛

『論語私存』訳注（十五）完　（水野・阿部・大場・松野）

にして色を作(な)さず、故に威ありて猛からず。恵は民財を以て言ふ。労は民力を以て言ふ。民財を費やさず、民力を労せざるは、仁に非ざれば能くせざるなり。故に之れに継ぐに仁を以てす。是れに由りて民に臨み、又た当に安舒、荘敬なるべくんば、則ち傲慢、粗暴の気、形(あらは)れず。故に又た之れに継ぐに泰威の美を以てす。此れ五美列する所の序なり。〇教へずして殺すは民を以て言ふ。戒めずして成るを視るは事を以て言ふ。此の二者は皆な苛急の悪なり。令を慢りにして期を致すは、令厳ならずして事期に応ずること能はざるを謂ふなり。出納の吝は、出納の際、有司の財を守るがごとく、吝みて発せざるを謂ふなり。此くのごとくんば、則ち遅疑して決せず、事機を失ふを致す。此の二者は皆な怠緩の悪なり。〇子張此に至りて必ず学已に実に就く。故に孔子、其の政に従ふを問ふに因りて、其の事を歴数して以て之れに告ぐ。行を問ひ、達を問ひ、政を問ふの時に比し、専ら内に反求せしむる者、漸く拡充せり。

［語釈］

〇問行　『論語』衛霊公篇・5章に「子張、行を問ふ。子曰く、言忠信、行篤敬なれば、蛮貊の邦と雖も必ず行はれん。言忠信ならず、行篤敬ならずんば、州里と雖も行はれんや。立てば則ち其の前に参するを見、輿に在れば則ち其の衡に倚るを見るなり。夫れ然る後に行はれん。子張之れを紳に書す」とある。

〇問達　『論語』顔淵篇・20章に「子張問ふ、何如なれば斯れ之れを達と謂ふべき、と。子曰く、何ぞや、爾の所謂達とは。子張対へて曰く、邦に在りても必ず聞こえ、家に在りても必ず聞こゆ、

と。子曰く、之れ聞なり。達に非ざるなり。夫れ達なる者は、質直にして義を好み、言を察して色を観、慮りて以て人に下る。邦に在りても必ず達し、家に在りても必ず達す。夫れ聞なる者は、色仁を取りて行ひは違ひ、之れに居りて疑はず。邦に在りても必ず聞こえ、家に在りても必ず聞こゆ」とある。

○問政　『論語』顔淵篇・14章に「子張、政を問ふ。子曰く、之れに居りて倦むことなく、之れを行ふに忠を以てす」とある。

【三】

○子曰、不知命無以爲君子也。不知禮無以立也。不知言無以知人也。

知命猶爲政篇五十而知天命也。君子成德之名。知天命而後謂之成德。立猶三十而立也。立必於禮。故不知禮則無以立。知言猶孟子公孫丑上篇所謂知言也。知言則心不蔽而人道明矣。故不知言、則不能知人。知言先明諸心也。知言而後可以立。立而後可以知天命。此推言進德之序、以明學必自知言始也。○此篇文多闕誤。其序此以終篇者、不必強求其義矣。

［訓読］

○子曰く、命を知らざれば以て君子たること無きなり。礼を知らざれば以て立つこと無きなり。言を知らざれば以て人を知ることなきなり。

『論語私存』訳注（十五）完　（水野・阿部・大場・松野）

命を知るは猶ほ為政篇の五十にして天命を知るのごとし。君子は成徳の名なり。天命を知りて而る後之れを成徳と謂ふ。立は猶ほ三十にして立つのごとし。立つは必ず礼に於いてす。故に礼を知らざれば、則ち以て立つことなし。言を知るは猶ほ孟子公孫丑上篇に所謂言を知るのごとし。言を知れば則ち心蔽はれずして人道明らかなり。故に言を知らざれば、則ち人を知ること能はず。言を知りて先づ諸を心に明らかにす。言を知りて而る後、以て立つべし。立ちて而る後、以て天命を知る。此れ推して進学の序を言ひ、以て学は必ず言を知る自り始まるを明らかにす。○此の篇、文に闕誤多し。其の此れを序して以て篇を終ふるは、必ずしも強ひて其の義を求めず。

［語釈］

○爲政篇五十而知天命　『論語』為政篇・4章に「子曰く、吾十有五にして学に志す、三十にして立つ、四十にして惑わず、五十にして天命を知る、六十にして耳順ふ、七十にして心の欲する所に従へども矩を踰えず」とある。

○君子成徳之名　『論語集注』学而篇・1章に「君子は成徳の名なり」とある。

○立猶三十而立　「爲政篇五十而知天命」の注参照。

○立必於禮　『論語』泰伯篇・8章に「子曰く、詩に興り、礼に立ち、楽に成る」とある。

○知言猶孟子公孫丑上篇所謂知言也　『孟子』公孫丑上篇・2章に「何をか言を知ると謂ふ。曰く、詖辞は其の蔽ふ所を知る。淫辞は其の陥る所を知る。邪辞は其の離るる所を知る。遁辞は其の窮

する所を知る。其の心に生ずれば、其の政を害ふ。其の政に発すれば、其の事を害ふ」とある。

［校異］

○知言而後可以立　『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）は「知言而后、可以立」に作る。

○此篇文多闕誤　『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）は「多」を欠く。

論語私存巻二十終

『論語私存』訳注（十五）完　（水野・阿部・大場・松野）